

幕末情報社会の研究

坂東俊彦

本論文では、嘉永六年（一八五三）六月三日にペリーが浦賀に來航して以降、明治維新を経て明治初期に至るまでの時期に数多く起きた政治的、社会的な事件や事故に対して、「日本」の国としての第一線での政治的発言力や権力を持っていなかった町年寄、町役人といった在地の支配者、地方自治の運営者的な立場であった人々が、これらの事件や事故の情報や事象の情報を入手し理解して、分析や判断を加えるといった一連の情報活動を通して、これらの事件や事故についての意識や対応、さらにはこれら情報を町の支配、運営といったものに活用していた過程を明らかにしたものである。構成は、序章のほか第一章から第四章、および終章に分かれる。各章の内容は次の通りである。

序章ではまず「INFORMATION（インフォメーション）」の訳語である「情報」の言葉の近世的な意味（文献史料上に風説、風聞の語で登場する。また風評、浮説、巷説、流言などの語も含まれる）や価値観を考慮しつつ、「何らかの行動を起こしたり、判断を下そうとしたりする時に、大なり小なり、何らかの判断を加えなければならない場合が多々出てくる。これらの場合に判断するための材料」といった概念規定をおこなった。そしてこれら材料としての「情報」とするには、入手、収集した「情報」はそのままにしておくのではなく、これらを理解した上でこれらに

分析、判断を加えるなど、「情報」を処理したものでなければならぬこと指摘した。

第一章では石清水八幡宮の有力な社士であり、近世には門前の八幡の町場における町役人でもあった河原崎家を例に収集、理解、分析といった情報活動について検討した。ペリー来航以来、幕府の積極的な情報公開の方針によって社会に出回る政治的、社会的な情報量が飛躍的に増加しており、河原崎家でも二代にわたって常日頃から書いている日記とは別に日記の内容を補完するような異国船の来航情報や海外情報、さらにはこれらに関する国内外の政治、社会情報などを冊子にまとめている。これらの冊子は入手した情報をそのまま書き写しているのではなく、日時が前後しているものは多少あるものの、項目別に分類されており、しかも文字の訂正はもちろんのこと情報の理解についての書き込みなどがされており、情報を入手し、書き写すことだけではなく、それを理解し、分析、判断をして活用していた状況が浮き彫りになった。

そしてその後、明治に入ると河原崎家からは初代、第三代の八幡町の町長や初代の町議会議長を輩出しており、これら幕末期における情報の入手、収集ルートの確保（一つのルートとは限らず、情報の比較検討ができる複数のルートがあること）や理解、分析、活用といった能力が明治初期における地方自治のリーダーとしての指導力、実行力につながっていくものであることを明らかにした。

第二章では京都四条大宮町の質屋・米仲買業であり、町年寄、明治に入っても中年寄としても活躍していた高木在中が残した日記を中心として、山城国葛野郡東塩小路村の農民であり、実質的に庄屋役を勤めていた若山要助の日記と比較しながら安政年間（一八五四～一八六〇）、とりわけ条約勅許問題や安政の大獄が断行されている時期におけるこれらの人々の政治、社会情報についての関心や意識を入手、理解、分析、判断といった一連の情報活動の状況を

通して検討した。

ペリーが来航して以来の人心の動揺を押さえるための幕府の積極的な情報の開示の方針は、この時期、安政五、六年にはすでに高木在中ら商人や在地有力者に居住地以外からの情報を入手、収集するための独自ルートを確立することをより一層うながすものであった。そしてこの入手ルートを使って積極的に収集した該当時期における井伊直弼をはじめとした江戸幕閣の政治動向についての情報とこれと同時に進行していた京都市中、つまり自らの目の前で起きていた条約勅許問題による幕府役人の行動や安政の大獄の断行の情況とを統合して理解、分析をしてこの時期の政治社会情況を認識していた。つまりこの時期にはすでに、情報の収集、理解、分析、活用といった一連の情報活動がおこなえるような社会環境になっていたのであり、それをおこなう者についてもその能力を十分に持ち合わせ、発揮することができるようになっていたことを明らかにした。

第三章では第二章と同じく高木在中の残した日記を手がかりにして、文久三年（一八六三）から慶応二年（一八六六）の間に寛永十一年（一六三四）の家光以来、二百三十年振りに、都合三度にわたっておこなわれた將軍家茂の上洛に伴う行列や公武一和の政策による和宮の將軍家茂への降嫁に伴った江戸への下向の行列などを見物することによる情報活動について検討した。和宮の將軍家茂への降嫁については、公武一和といったこの時期の政治的背景をはつきりと理解していなかったのであるが、和宮が將軍へ降嫁すること自体には、これらに関連した行事などにいわゆる経済効果を期待していたのである。しかし公武一和といった政治情況を認識していなかったこともあり、和宮の行列を見物する動機や目的については、ペリー来航時における「黒船」の見物とその目的や意識はあまり変わるようなものではなく、天皇家と將軍家との間の最高の格式での婚礼といった、今まで実際には見ることもなかった珍しいもの

を見物に行くといった興味や好奇心によるものであった。

ところがその一方で文久三年三月におこなわれた最初の將軍家茂の上洛時には、加茂兩社への行幸に將軍が供奉していった行列を見物し、石清水八幡宮への天皇の行幸については御所から出発する行列を見物した。(石清水八幡宮への行幸には、將軍は供奉して行かなかった) この見物の目的については、事前に摺物や錦絵などから入手していた天皇と將軍の政治的な位置関係の逆転の情報を確認するためであった。その後文久四(元治元)年一月の二度目、慶応元年閏五月の三度目の上洛時においては、京都市中での將軍の行列そのものは見物をしていないのであるが、二度目の上洛時には海路による上洛で使用した幕府の軍船を大坂湾の沖合まで、わざわざ船を出して見物に出かけて、幕府の軍勢力といったものを確認している。またこの時期に京都市中で頻発をしていた天誅による殺人の死体、首などの晒された現場に出かけるなど情報活動は自身の行動を伴って広範囲にわたっておこなわれるようになっていたことが明らかになった。

第四章では慶応から明治への移行期における社会的不安定の中での情報活動と町自治の活動との関連や政治の流動的な状況の中での情報活動と政権移動の認識、さらには明治初年における情報活動について検討した。慶応期の諸物の継続的な上昇による経済の危機的情况の中において町年寄として、町内の困窮民の動揺、つまり打ちこわしの発生を押さえたり、これらの騒動を事前に防いだりする方策を当時類似した社会状況にあった江戸に求めて、慶応二年九月に起きた江戸の困窮民の騒動の運動形態といったような状況の情報を入手して理解し、方策を考えようとしていた。

またその後の大政奉還から王政復古の大号令といった政治体制の変化、政権が移動、さらには町奉行の廃止といっ

た京都市中の治安、行政の機構が変化をしいった中において、これらの情報を入手して、どのような政治状況になっているかを理解した上で、日記に書き込んでいた政権担当者の呼称を的確に変化させており、政権の移動については意識の上でもはっきりと認識をしていたことを明らかにした。

そして鳥羽・伏見の戦いを経て明治新政府成立後の日記の記述には、新政府から出される五箇条の御誓文や五榜の掲示といったことをはじめ政策や政治に関する情報の記述が極端に少なくなり、町の支配者、指導者としての行動の記述が増加してくる。この点については、明治新政府成立後すぐに「太政官日誌」が発刊されるようになり、政治、社会情報が印刷物として公式に社会に発表されると、情報を入手するといった段階が必要なくなり、これらの情報を日記に書き写す必要性が減少していた新政府の新しい政策や制度の状況下では、町役の政治的な行動そのものが政治情報となり、町の政治の中心者となっていったことが明らかにした。

終章ではこれまでみてきた時期の日常生活の中での情報活動について検討をした。この時期、政治的、社会的に必要な事件や事故が起きている間に茶会や歌会、囲碁、将棋の会といった会や酒飯の宴が日常的に盛んに開かれていたが、これらは定期的に開かれていた町の寄合とは別に、情報に対して同じような関心や利用性、価値観を認識し、同じような知識レベルであり、判断力や認識力を持ったいろいろな立場の人々との日常的な情報交換、意見交換の場として活用されていたことが明らかになった。